

William Makepeace Thackeray の宗教性について

——その書簡集を中心として——

太 田 藤 一 郎

1

牧師の娘 Charlotte Brontë の *Jane Eyre* (1847) では、寄宿学校で不幸な生活を経験した Jane が、Thornfield Hall の家庭教師となり、邸の主人 Rochester と恋におちいる。しかし彼をとりまく世界は、上流階級の人々にかこまれた、巧言令色の世界であった。愛のかなしさに苦しむ Jane は、庭の大木が落雷で引裂かれるのを見た。その現象には、次のような暗示が秘められている。現状では二人の愛は結ばれないということ、男の財産がなくなり、彼が一人の裸の人間となったときに、二人の愛は実現するということを示している。邸をのがれ、原野をさまよう Jane は、牧師 St. John に救われ、海外布教の助手として牧師から結婚を求められる。布教に手をかすことを拒否し、Rochester の許に帰ってきた彼女は、彼の館の焼失、狂気の妻の焼死、失明した Rochester の姿を発見した。彼にとって真に必要なものは、Jane の愛であった。神の愛をひろめようとする牧師の求愛を拒否し、Rochester の眼となり、手足となり、生命となろうとする Jane の愛こそ、神の愛であり、それは Jane という人間の心の中に発見されるものである。

Charlotte の妹 Emily は、神の世界からではなく、人間的立場から、愛と許しとを追求しようとした。そして、すでに神の精神を喪失した19世紀キリスト教社会の空洞化の傾向、神の無力化と教会の空漠さを描こうとし

た。彼女の *Wuthering Heights* (1847) において、虐待と、差別と、愛情の裏切りにたいして、Heathcliff が復讐を遂行するが、次第に彼の峻厳、苛烈な精神は氷解し、彼の心は快活になり、寝食を忘れ、自分の生命とも言うべき愛する [Catherine の幻影を求めて、戸外をさまよひ、遂には娘時代の Catherine が使用した寝箱の中で、微笑をうかべ恍惚として死んでしまう。教会の神を信じて生きている Edgar, 罰することを神にまかすことが出来ず、復讐の満足を経験しようとした異教徒の Heathcliff, この二人の男達の争いと、愛憎の相剋の激しさの中で肉体と精神とが分裂し、人生を終った Catherine と Edgar の墓石は、教会の墓地ではなくて、嵐ヶ丘の麓に、しかも Heathcliff の墓石と一緒にならべられた。ここに、教会の中で説かれてきた従来 of 神の權威の喪失、神にたいする不信感をみるとともに、その神の權威に挑戦して、最後にたどりつかざるをえなかった巨人 Heathcliff の許しの世界を発見する。作者は、その激しい気性から、メソジスト教派の地獄、罰にたいする考えに堪えられず、罪人は永遠に地獄におちるという信条を拒否し、愛と許しの福音の中に救済のあることを認め、悪に絶対的な力をみとめなかった。即ち Catherine の裏切により、Heathcliff の愛情は、すべてのものを自分の手で破壊しようとする憎悪と変り、彼をして神の存在を否定させたが、最後には憐れみが生れた。彼の心の中 of 愛、彼の最後の許しこそ、いわゆる神の愛にあたるものである。

従来 of キリスト教にたいして疑問を持ち、人間的な自由な立場から神を見ようとして、'Religion of humanity' の立場にたった George Eliot の *The Mill on the Floss* (1860) の中に見られるテーマは、対立にたいする和解である。Tom は、父が敵視している相手の息子 Philip を愛する Maggie を許すことができない。苦しいジレンマから逃れるために、彼女は人生 of すべての慰藉をすて、魂の平安を得ようとする。しかし、不具の Philip から彼女の考えの間違いと、彼女に美しさの失われたことを指摘される。この瞬間 of Philip は、彼女にとっては救いと力であり、人間の中

に内在する神でもあった。Tom は、妹に Philip との絶交を聖書にちかわせる。ここに兄妹の対立が更に深さを加える。従妹 Lucy の恋人 Stephen と親密になった Maggie は、Tom から追放される。しかし、降雨のためフロス河は氾濫し、Maggie に救助された兄は妹を抱き、許すが、そのせつな、二人のボートは流木に沈められ、洪水のあと、抱き合った死体となって発見される。この結末は、対立の和解、許しと愛との証しとも言うべきものであり、Maggie は対立する Tulliver 家と Dodson 家とを和解させる神の愛の啓示と言えるであろう。

Thomas Hardy の *Tess of the D'Urbervilles* (1891) の中にも、神の不在が描写されている。真夜中、原始林の落葉の上で、Alec によって Tess が犯される時、彼女の純潔を守ってくれる天使も、神も現われなかった。Tess の赤児の洗礼、埋葬を牧師が拒否したことは、実際に神はすでに許しと愛を失っていることを示している。聖職につくことを拒否し、社会の因襲性を軽蔑して、農場の新しい経営を志した Angel は、Tess との結婚の夜、彼の新しい倫理性にもかかわらず、彼女の純潔についての彼の価値判断は、旧来の因襲的な基準に逆もどりして、彼女を許すことが出来ず、単独でブラジルに移住する。この点に、寛恕の精神を失ったキリスト教の倫理観にたいする作者の皮肉が発見される。しかし、Tess にたいする考えの間違いに気付いた Angel が、帰英し、彼女をさがし当てたとき、窮乏のため Alec と同棲せざるをえなかった彼女は、Alec をナイフで刺殺し、Angel とのがれる。異教徒の寺院跡の石の上に身を横たえた彼女は、安らかな気持で捕えられる。不幸な彼女に安らぎの場を与えたのは、教会の祭壇ではなく、皮肉にも異教徒の寺院跡であったという事実である。

2

上述のように、イギリス 19 世紀中葉の、悲劇性をおびた作品を検討すると、そこに神不在の現象を発見する。この事実は、宇宙を神による創造

であると、抽象的に解釈するのではなくて、近代科学の発達により、宇宙を科学的な立場から解明することによって生じた、人生にたいする幻滅感によるものであろう。神と人間との関係が明確にされるにつれて、教会によって与えられる神が、本質的な純粹さを失い、形骸化し、人々を利己主義、偽善、自尊心、偏見の奴隷にし、社会的地位、金銭が幅を利かし、愛情、人間的尊厳、同情心が阻害されたことが明らかにされた。こういう現象は、時間的には Brontë 姉妹などの作品あたりから突如として現われたものであろうか。この兆候は、すでにもう少し早い作家、たとえば Thackeray の作品にも有りえなかつただろうか、という疑問である。何故なら、彼の *Vanity Fair* は、奇しくも *Jane Eyre*、また *Wuthering Heights* と同じく、1847 年の作品である。

18 世紀の時代にみられた強固な社会秩序は、19 世紀の時代には姿を消し、不安定な社会となり、田舎の貴族、地主階級のもっていた勢力は、新しい生産様式の経済に支えられた産業都市に移動し、都会に新興資本家階級が抬頭した。科学の発達は社会状態を変化させたが、特に Darwin の *The Origin of Species* (1859) は、旧来の哲学、道徳、宗教に影響を与え、実証主義、功利主義、無神論を生み出した。James H. Wheatley は、この時代の初期の三つの重要な力として、福音派のキリスト教、破滅にひんしているキリスト教の諸教派からキリスト教の本質を救済しようとするところみ、そしてロマンチズムにたいするなじみを指摘している¹⁾。Thackeray の創造した Arthur Pendennis は、“the domestication of Romanticism”²⁾ の手本とみなされる Carlyle の考えの具象化されたものと考えられ、Thackeray 自身も、ロマンチズムになじんだ人と言える。彼が心をひかれたものは、人間の心の中の純粹さ、無邪気さ、やさしさであった。19 世紀初期の人々は、意思強固、实际的、忍耐強く、協道にそれない精神の強さがあった。しかし、Thackeray にはこの精神の強さが不足し、宗教、道徳、政治、芸術にたいして関心をもちながら、そのいづれ

にも強く取組んでいくことが出来なかった。宗教、哲学の論争に興味を持ってながめたが、宗教にたいする彼の態度は明確でない。即ち彼の友人たちの意見によると、彼の宗教心を認める、彼には宗教心がない、宗教心があるとみせかけている、—これらの三種類の意見にまとめられる。Charterhouse 在学時代、彼は Benjamin Boyes 夫婦の寄宿舎に住んでいたが、この夫婦の息子の覚書によると、黒髪、バラ色の顔色、知的な眼ざしの Thackeray は、お人好しで、暴君的な要素はなかった。子供時代の Thackeray の目にうつった母の姿は、丈高く、堂々として、優雅古風で、女王のような髪型をしていた。彼女はやさしく、批判精神にみち、小さい子供たちには情熱的な愛情を持ち、困っている人たちには異常なほどの同情心を抱いた、感情の激しい女性であった。彼にたいする母の盲目的な愛は、避けられない本能的な感情ともいうべきものであろうが、時には激しい嫉妬心に変形し、青年時代の彼をくるしめ、彼の人生観の一部、即ち感傷性を形成し、その結果、美しい、魅惑的な母にたいする少年 Thackeray の思慕は、彼をしてマドンナのような容姿の女性を崇拜させた。

彼の母は福音主義の信仰者であり、この信仰が彼女に力を与え、息子の魂を監視し、まもらせた。息子を自分のものとして所有することにたいして、神の許しを得ており、息子の魂の安全を計らなければならないときには、彼女は息子の関係する女性に残酷になることを神から許されていると考えた。母のこういう良心は、彼女をしてこうかつな豹のように行動させ、その冷酷さが、Thackeray をくるしめた。その結果、彼は、子供を甘やかす母親は放蕩息子をつくり、信仰心の篤すぎる母親は、気まぐれな子供をつくることを知った。彼は、母の意見の偏狭さと、女説教師の立場をとる母の信じる神の存在とに反抗した。母の福音派の禁欲主義にたいして、彼の宗教は自然を崇拜しようとする傾向とも言うべきものであり、彼は、Wordsworth の自然崇拜、Coleridge の神秘主義などを結合して、彼の宗教と考えていたのではなからうか。楽しいもの、美しいものを人間が享受

するのが、神の思召であると彼は信じた。それ故、禁欲主義の母の立場に、彼は同調出来なかった。母は、息子の *Vanity Fair* が、利己主義の人物に満ち、宗教の道を教える要素がないと非難している。母に書きおくれた手紙の中で、Thackeray は次のように、自分の真実追求の考えを明らかにしている。

I must follow my truth though it's not my dear old Mother's
...You don't like the people I like nor the opinions I like nor the
books I like—I don't like what you like—

ここに、母、子の見解のちがいが明瞭に示されているが、母は彼女の宗教から、なぐさめを、恍惚たる信仰を得ており、聖句崇拜は彼女に大きな益を、冥想のよろこびを、天国との交わりを与えた。しかし、Thackeray は、

I can no more fit your religion to my soul, than I can fit my
foot to your shoe.

と、母の宗教に反撥している。彼は母が不幸であること、その不幸の原因が彼女の宗教からきていることも知っていた。彼はプロテスタントであり、彼はローマ教会に反対し、イエルサレムの教会の要求、ごうまんさ、残酷さに反対した。母は彼の娘たちに、神の奇蹟、イスラエル人によるカナーン人殺りく、モーゼの宇宙創造説をうけ入れさせようとした。I don't believe God ordered the Israelites to butcher Canaan;... と、Thackeray は母のこういう宗教に反抗したのではなかろうか。この殺りくを神託 (an Oracle) だと信じていた彼の母を、また St. Paul をも、Thackeray は間違っていると考えた。

I love and worship my lord Jesus Christ—whose Divine Heart
had pity for all errors,...

Thackeray の信じた神は、過ちにたいして許しの御心をもった Jesus Christ であった。彼に最も強い影響を与えた人は、彼の母であったが、彼と母とは宗教上では、このように鋭い不一致をみせたのである。また母から Thackeray 宛の手紙によると、彼の長女 Anne も強情に神を信じないこと、旧約聖書にたいして関心がないこと、新約聖書も歴史的なものにすぎないと言っていると、報告している。この点については、1852年10月の Anne 宛の手紙の中で、火曜日に敵を憎み、水曜日にはその敵を愛するなどということは、正しいとは言えないから、「汝の敵を愛せよ」などとは言いたくない。神の真理を見ないからとて、どうして涙の夜毎を過さなければならないのか、と彼の考えを明かにしている。このように考える Thackeray にとっては、聖書は単なる記述であり、一つの書物を意味するにすぎない。それは神の真理をふくみ、神なる存在の歴史であるが、完全なものでなく、神については千分の一もふくんでいない。聖書にたいする彼のこういう捉え方を、愛する子供たちからかくすなら、それこそ神の前に不真実となるだろうと、Thackeray は考えたのである。

3

Thackeray の妻 Isabella は三人目の子を生んだ後に、健康を害し発狂した。この不幸は彼の宗教心の欠如のためであると考え、彼の日記は神の助けを求める祈禱、“O God, O God give me strength to do my duty.”ではじまっている。彼は一日に何度も神に祈っている。妻の病気は徐々に良くなり、彼は神への感謝の気持を抱いた。この場合の神にたいする考えは、ユダヤ人によって信じられている God, Hell-fire, Atonement, Heaven, Angels などではないようだ。1845年8月2日付の母宛の手紙で、Thackeray は、異端、異説を唱えるつもりはないということ、しかし偽善者になりたくもない、それこそ神にそむく大罪であること、母の言う正統派の信仰が、どういうものであるかわからないということ、母の信仰、母

の見解は、母だけのものであるということを書いている。彼は旧約聖書を嫌った。その理由は、優しさが無い、けんそんさが無い、許しが無いというためである。旧約聖書にあるのは、排他性、尊大な呪いの言葉、横柄さである。したがって、彼が本当の信仰を持ったと言えば、司教にたいして恐ろしく失礼なことになると彼は言っている。ここに、Thackeray のまじめな性格を発見する。彼の考えによると、すべての母親、すべての息子たちのはるか頭上に輝くはずのものは、偉大なる知性そのものであって、それ故に神と考えられるものは絶対の真実なのである。それに反して、呪いの言葉をつくった僧侶たちも、名誉をつくった貴族たちも、キリスト教の精神を殺してきた。それでは、この世の中で誰がキリスト教徒なのか、道徳精神とは一体何か。Thackeray は道徳的になろうと苦心したが、実行はむづかしかった。そのために、彼は真実を信仰し、真実に頭を下げようとした。¹⁰ また、1850年8月24日付の彼の友人の妻 Mrs. Brookfield 宛の手紙によると、愛情は最も偉大であり、芸術は愛情に次ぐものであると書きおけている。Thackeray は、善良な、純真な女性たちの中に、神の後継者を発見しようとしている。

病妻をかかえた Thackeray にとっては、Mrs. Brookfield は天使に見えた。彼は友人のこの妻を愛していた。彼の結婚生活の幸福はわずか4年間にすぎなかった。彼も彼の妻も11時間をベッドで過ごし、11時以前に朝食をしたことがなく、彼の一日の活動時間は僅かに5時間しかない、という悩みを彼は母に打明けていた。¹⁰ 次女 Jane の幼死については、悲しみよりも、むしろ何かうっとりするようなものとして彼は感じている。長女 Anne の重病のときにも、神に特別に祈ることは間違いであり、無礼なことであるとすら考えた。神から求めるものは、如何に黙従するかということ学ぶことであると Thackeray は考え、ここに人生にたいする彼の運命観の一因を見ることが出来る。この頃、彼の妻 Isabella の母も狂気の状態であった。1840年9月12日、Isabella の病状がやや良好となり、

Thackeray 一家は London に出発したが、彼女は便所の窓から海に身を投げている。彼女は完全に精神異常になり、無関心、無言、鈍重の状態におち入った。イギリスや大陸で色々な治療がほどこされたが、1848年には、彼女は家族の者を判別出来なくなり、看護婦につきそわれ、イギリスで1893年まで生きつづけた。結婚したとき、彼女は18歳であったが、三人の子を出産し、4年間の結婚生活は肉体的には重荷であった。Thackeray自身は幸福をかちとるために積極的に貢献しようとした。看病生活は、彼の仕事にも影響した。病妻との生活は、彼自身をも狂いそうな状態にし、4日間一行も書けなかったというような、作家としての執筆不可能の致命的な打撃を明かにしている。1840年9月21日付の母宛の手紙で、“...she was never fit to be a wife.”と、彼は訴えている。妻の病気の悪化していくにつれて、一方ではMrs. Brookfieldへの彼の愛情は深まっていった。彼は孤独生活に疲れ、子供たちとの別居生活に耐えられず、家庭生活の疲れはThackerayをして神経過敏にさせ、健康を失わせた。この時、一人の親切な女性から亀のスープと美味いぶどうを送られ、彼は世の人々の親切を身にしみて感じた。健康になると、彼は教会にも出かけている。無一文である。no fun this month—Life is made up of disappointment...¹²⁾これが、この時の彼の生活状態であった。しかし、借金、酩酊、無秩序な生活、インチキ療法、虚偽にたいして、作家としての憤りを持ち、流行や政治のニュースを自信ありげに書く詐欺師たちを、彼は作品の中で笑ってやりたいとも思った。彼の意図することは、親切に真実を語ることであった。不幸な家庭生活にあって、彼に力を与えたものは、純真な人々の心の中にある親切心であった。

4

キリスト教では、人間性を気高い部分と、賤しい部分とに分析し、原罪をみとめ、アダムの子はすべて悪なるものであるから、信仰を持つとき、

悪を免れると説かれている。ギリシャの Plato, Aristotle も、人間性の二元性—即ち自然的動物的な部分と、真に人間的神的な部分とを認めている。神にたいする考えも、世界の創造主を神とみる外なる神、即ち「創世紀」、*「ヨブ記」*などに継承された神にたいして、我々の心の中に内在する神がある。ギリシャ人の神は、人間によって造られた人間的な神であると言えるなら、Thackeray の考える神性なるものは、人の心の中にある goodness, love であろう。「伝道の書」が、ヘブライ語の原語 (Kohelah) — 誰か、(ダビデの子エルサレムの王ソロモン王か) という意味であるとするなら、このコヘレスなる人物の尊ぶ美德は、中庸である。この人物は、ギリシャ、ラテンの「何事も度をすごすな」という格言に最も共鳴し、すべての行過ぎをきらったということである。Thackeray は、このコヘレスに深く共鳴し、影響をうけた。Vanity Fair の “Before the Curtain” の記述、及び結末 “Ah! Vanitas Vanitatum! Which of us is happy in this world? Which of us has his desire? or, having it, is satisfied? — Come, children, let us shut up the box and the puppets, for our play is played out.” にみられるように、Thackeray は、皮肉に、しかも詠嘆的に人生の虚栄をみつめ、人生を一つの空華の戯曲とみなし、彼自身をその人形芝居の興行師になどえた。この頃、妻の不治の病気は、彼の諷刺精神を弱めさせたが、

His life in the year after 1841 made it inevitable that he should sink the man of sentiment in the wit and cynic.¹⁹

と、指摘されているように、Thackeray は、人間の意思を無視して、人生の旅路の方向を変えていく運命の皮肉をみとめ、人生は空しいという敗北感を深めつつあった。友人で、牧師補であった William Brookfield の宗教的影響をうけ、19世紀の社会慣習を是認していったが、病妻のためになされた神への彼の祈りは、次第に批判的に、懐疑的になっていった。

James H. Wheatley は、Thackeray の批評態度をvariety¹⁰と言っている程にも、この時期の彼の人生観、宗教観は不安定であった。彼は共和主義者を自称し反貴族主義的の見解を表明しているが、彼自身も俗物であった。妻の病気は、彼をして陽気な生活に魅力を覚えさせた。彼は *The Book of Snobs* で、dinner-party snobs を嘲笑しているが、彼もその俗物の一人であった。彼の性質の複雑さから生れた懐疑主義には、愛情、優しさ、人間性が交差している。少年時代より母の愛情に飢え、人生を空なりと観じさせた彼のこの運命観は、彼の組織力、安定性を失わせ、人生批評を弱いものにさせた。彼には、感傷性を軽蔑しながら、彼自身が感傷性に陥っているという矛盾がある。人間の傲慢さ、名誉欲も、虚栄心から生じ、男女の愛情が失われると、家庭内は偽善的となる。互に嘘を言い合い、道化芝居を演じている空しい人生において、誰が幸福になりうるのか、愛を知らない人は人生を知らない——これが、Thackeray の到着した信念である。愛こそ一切の野心にまさり、富よりも貴重であり、名誉よりも高貴であると考えた彼の感傷的見解は、涙もろい当時の読者の関心をひき、欠点とは考えられないで、むしろ大いに活用することが望まれた。goodness, intelligence, truth, あるいは、fun, truth, love, これが彼の宗教的信念とも言うべきであろう。愛こそすべてのものを支配する最高のものと考えた Thackeray の後年の中心思想の根幹となったものは、tenderness, kindness であった。Cambridge 在学時代、すでに彼の宗教心は動揺し、聖書に基礎をおいた彼の道徳は破壊され、母の考える神の存在を退けていたが、Dr. John Brown 宛の手紙で、...love and truth are the greatest of Heaven's commandments and blessings to us;...と言っているように、Thackeray には神の戒律のうちで、愛情と真実が最も偉大であることを認めている。作家たるものは、すべからく名誉を楯となし、真理を槍先となし、おんけんな人たち、女性たちには丁重親切であり、残忍な人間には剣を抜いて立ち向う、と彼の作

家としての態度を明かにしている。彼には宗教的要素よりも、愛情、真実が、彼の将来を決定づける主要な要素となった。当時の美しい、間抜けなヒロインを嘲笑する手段として、Amelia を設定し、ヒロイズムを否定しようとした *Vanity Fair* において、彼は多様な素材を統一し、明確な真実を表現しようとした。¹⁹ この作品の後に書かれた *Pendennis* の序文の中で、彼はこの作品が芸術的に駄目であっても、真実を語ることに努力したいと言っており、1850年6月3日付の娘たち宛の手紙の中でも、

The Whole Truth is what we worship and bow down to,...

と、真実をあがめ、真実に頭をさげようとする彼の態度を披瀝している。彼は Mme. de Florac (彼女は Thackeray 夫婦の母に似ていたので、彼女は Thackeray 夫婦から愛されていた) について言及し、善良な、純真な女性たち、忍耐強い、忠実な女性たち、たよりになる。柔和な女性たち——こういう女性たちの中に、神の後継者を発見する、と言っている。愛情は偉大であり、彼は善良、純真な女性の心の中に神をみている。

5

Thackeray の創作態度は、人間性の真、偽の両面、真実の追求であった。Mrs. Procter が Abraham Hayward 宛に、*Vanity Fair* を批評しているところによると、この作品には全く気取ったところがなく、作中人物は悪魔でも天使でもなく、生きている現実性をもった人物たちであり、この作者は、すべての階級、すべての時代にみられる感情を取扱っていると書きおけている。ここに指摘された点は、病妻をかかえ、家庭の不幸に沈潜した作者の Thackeray が、感情にはしることなく、また神によりかかる望みもかれて、人生を喟嘆的に諦観した果ての、イギリス社会風景の終着絵図ともいべきものではなからうか。Thackeray のこの人生観については、David Daiches が、*Vanity Fair* の人物と彼等の行動は冷

笑的に考察されているが、全体の雰囲気は初期の作品に比較して、ずっと穏やか (gentle) である、と批評している。¹⁰ この評言の中にも、この次元での Thackeray の態度を看取出来るであろう。Vanity Fair にたいする Thackeray 自身の創作態度は、1847 年 9 月 5 日付の Abraham Hayward 宛の彼の手紙の中で、真実を語ることに芸術家として全力を傾け、大嘘をさけることに努めた、と書いていることによっても明瞭である。また、1847 年 7 月 2 日付の母宛の手紙の中でも、一人の完全な人物を創造することが目的ではない、Amelia は利己主義な女性であり、Dobbin, Briggs この二人だけが本当に謙譲の美德を持っており、他の人物はみないやらしい (odious) と述べ、貪欲で、気取りやで、賤しい根性の、自己満足した、上流階級の美德なるものにあぐらをかき、神なしに暮していく一群の人々を描くことを、彼は特に望んでいる、と書いている。19 世紀のイギリス社会においては、利己主義と野卑は牧師の間にも発見されたのであるが、この利己主義、野卑にたいする彼の批判に、バランスと深さとを与えたのは、彼の¹⁰もつ優しさと心の温かさで、神の倫理性ではなかった。George Osborne に想いをよせる Amelia の哀れさを見て、二人を結婚させたのも、また George の戦死後の未亡人 Amelia を経済的に精神的に援助しつづけたのも、William Dobbin の大きな愛情にほかならない。

ここで、何故 Thackeray が Dobbin を愛情の人にしたてたかという点を考察してみる必要がある。Gordon N. Ray が *The Buried Life* の中¹⁹で、Amelia が “good woman” に創造されたという世評にたいして、Thackeray 自身は最大の軽蔑を抱いた結果、Dobbin の愛情に応じるだけの価値のない、愚かな Amelia に、Dobbin の怒りの感情を爆発させ、二人の本当の立場を Thackeray は明らかにしようとしていた、という Miss Elizabeth Drew の見解を示している。とは言うものの、Amelia は “the perfect type of sweet selfless womanhood” であると、Thackeray 自身によって幾度か主張されているという矛盾のために、彼女にたいする Dob-

bin の軽蔑は弱められてしまう。しかし、Dobbin は彼女と結婚したことについて、実際には自分のあやまりに気付いている。ここに人生の皮肉をみる。また、上流社会にせり上るためには、いかなるひんしゅくを買おうとも動じることなく、術策を弄した Becky Sharp の最後の扱い方についても、Thackeray は poetic justice をさけている。Joseph Sedley の残した金で、イギリスの田舎に身をひそめ、教会の慈善事業などに首をつっこみ、Becky は信仰心の篤いような生活をしているが、昔の容色を失い、かつら、義歯をつけ、笑うとぞっとする顔付になった。ここに Thackeray の皮肉さが、Becky の結末をこのようにさせた¹⁹とみるべきであろう。Thackeray の芸術性は何か。John W. Dodds の見解によれば、時々現われる諷刺、機智でもない。彼の人生観をとおして表現される皮肉である。それはもの悲しい、もの思いに沈んだ、人間性によってやわらげられ、あたためられた皮肉である。Thackeray は、あらゆる人をして、心みち足りないままに、幸せを感じるの²⁰のないままにしておきたかったのである。そして、Lambert Ennis が、

Equally important are a shift in his attitude toward the public which evolved during the writing of *The Book of Snobs*, a religious conversion of sorts, the success of *Vanity Fair*, and the affair with Mrs. Brookfield. All these events combined to effect the metamorphosis of Thackeray from a slashing satirist to a sentimental novelist.²⁰

と指摘しているように、平凡な改宗、*Vanity Fair* の成功、Mrs. Brookfield との関係などが、相寄り、原因となって、Thackeray を鋭い諷刺家から次第に感傷作家に変貌させた。彼は諷刺を忘れ、おどけた調子で人生に直面し、感傷小説を書かうとした。女性に甘いこと、心やさしく、愛情ぶかいことは、何物にもまして良いことであると彼自身は認めた。そのた

め Amelia, Laura, Helen, Rachel などの女性をとおして、彼は気の抜けた美德を称賛させられる破目になった。しかし、彼は自分の人生観の変化を敗北とは考えなかった。

病妻をかかえた家庭の不幸や、親友 Brookfield の父の死亡によって、人生にたいする Thackeray のビジョンは破られ、彼は幻滅的、喟嘆的になった。‘All is vanity’ という観念は、彼の人生観の核心となり、*Vanity Fair* をつらぬき、笑いのうらに一沫のもの悲しさがあふれる。彼は Charlotte Brontë の *Jane Eyre* を読んで、感激し、Some of the love passages made me cry—... とこの女流作家に尊敬と感謝をささげており、²⁰ 長いあいだ人間ざらいつか、冷笑家とかよばれてきたけれども、彼の心は石でないこと、芸術、生活において感情が注意深く神聖に用いられるべきであると彼は考えている。²¹ 彼の友人 Trollope の Thackeray 評にも、

Thackeray was “one of the most soft-hearted of human beings, sweet as Charity itself,...”²²

と彼の優しい心が明らかにされており、また Lambert Ennis は、Thackeray の晩年の sensibility は、増大していく nostalgia の中にあられ、*vanitas vanitatum* の思想は、彼をして過去の生活をふりかえり、みつめさせたと指摘している。²³ 晩年の彼は、不正、悪徳を憎んだり、皮肉ったり、攻撃したり、諷刺したりすることよりも、愛することの方が遙かに高度の知的行為であることを認めるまでに変貌したことを、1854 年に James Hannay 宛の手紙の中で書いている。また、James H. Wheatley は、Thackeray が諷刺精神を持っていたために、かえって駄目にされ、複雑多様な方法で、正常さと脱線とを描いている喜劇的作家であると批評している。²⁴ しかし、John W. Dodds によって、諷刺的仮面をつけて、誰にでも親切な一人の感傷的人物として、歩きまわっているというふうには、自分を考えることが好きであった、²⁵ と彼の性質には諷刺的要素と感傷的要素が

結合されていることが指摘されている。彼の cynicism は、晩年のおだやかな気分の中で、切りすてられ、*The Virginians* では、世間で悪と認められている偽善がのさばっている。彼が社会の虚偽、愚行のばくろに真剣でないことを Charlotte Brontë は発見して、とまどっている。ここに彼の ambivalent な性質がある。

このように、Thackeray の性格批判に多少のニュアンスのちがいがあがあるが、Lambert Ennis の見解によると、19 世紀の人々は、神を信じない人々を諷刺家と考え、教会の説教壇から説教されるときだけ、彼等は道徳をみとめているが、Thackeray の諷刺の中には道徳性がふくまれている、彼の諷刺は識別力のある読者層、ある程度教育のある、立派なイギリス女性たちに浸透していたということである。²⁰ L. Ennis のこの見解から帰納できることは、Thackeray には神にたいする信仰心が殆んどなく、むしろ道徳性の方が強かったということであろう。1848 年 8 月 20 日付の Lady Blessington 宛の手紙で、気むづかしい諷刺家が描いた社会に比べて、実際の社会の方が遙かに親切で立派である、と Thackeray は社会の親切を強調しているし、また、1842 年 6 月 11 日付の母宛の手紙でも、彼は、家庭を愛する、やさしい、正直な男こそ、嘘いつわりのない人間であると言っている。また 1852 年 4 月 17 日付の母宛の手紙では、

...the best of all qualities in the world is not wit but good-nature.

と言っているが、ここに晩年の彼の変化をみる事が出来る。また、*Vanity Fair* was a retreat from his satirical position under pressure of the Victorian mistrust of satire.²¹ と、Thackeray の作品にたいする Lambert Ennis の見解表明をみても、彼が感情的要素にまけて、諷刺の世界からしりぞいたことがわかる。

Thackeray にとって、新しい美しい理想の女性 Mrs. Brookfield は、

彼の生活の感情的な面において、中心的要素となった。しかし、彼女は夫から嫉妬心のため乱暴に取扱われ、Thackeray との交際が断たれた。彼女との別れの辛さが、Thackeray をして、諷刺、皮肉、からかいの精神を忘れさせ、彼の感傷的運命観を強くさせた。1853年4月5日付の Mrs. Bayne宛の手紙には、...all this depends upon the Fates and Tomorrow, of which no man is the master. というように書かれているし、また1854年3月8日付の Percival Leigh 宛の手紙にも、We are the slaves of Fate:... と書いている。その翌年3月6日、母への手紙では、Fate is stronger than all the advice in the world,... と、彼は運命の力の前に全面降服している。娘の Anne は、1852年9月21日に書かれた彼女宛の父の手紙から判断して、父 Thackeray は、病気で死にそうに感じた時、St. Augustin や St. Theresa と同じように、やすらかな精神で、神を信頼し、神の智慧、慈悲を確信した、と述べている。彼が愛し、あがめる神は Jesus Christ なのである。彼は、神のしもべ、神によってつくられたものであると信じた。Christ は God と名乗らないという彼の考えを、Edward FitzGerald に手紙で書いているらしいが、1831年10月5日付の FitzGerald からの返事では、聖書の中で Christ が God を自称しているの、その点では Thackeray がまちがっていること、もしも Christ が God でなかったら、Christ はペテン師であるかもしれないし、したがって、あのような立派な生活は行えないだろうと述べ、Christ 即ち God であると、Thackeray に言っている。宗教問題について話すときには、彼はすこぶる真面目であった。妻の病気も、神にたいする信仰心の欠如だと考えたほどである。彼は講演旅行によって、病妻と娘たちを養う生計費を得たし、Mrs. Brookfield との別離の悲しみをやわらげたが、このような彼の作家精神は、彼をして次第に人生にたいする批判精神を失わせた。1852年12月1日付の Edward Livingstone Wells 宛の手紙の中で、“Love & Truth are the best of all:... ”と言っているとおり、誠実な彼は、真実

を愛し、愛情に生き、愛情を発見し、表現することが、この人生で最も善いことだと考え、真実に比べて愛情の方が優位を占めたのである。その翌年1月17日付の Harriet Thackeray 宛の手紙で、

...there's no Fun at home to-day—only a great deal of love for my dearest women.... May God help us to say the Truth always.

と述べていて、Truth, Love のほかに、人生において Fun の必要であること、それにたいする望みをも明かに示している。妻や娘たちは、彼にとって慰めであり、娘たちの親切は彼の心を感動させた。

It seems to me that Love proves God. By love I believe and am saved.²⁹

このように、彼は愛こそ神であることを認めている。もっと以前に、1834年10月8日付の Edward FitzGerald 宛の手紙の中で、Thackeray は、love は a kind of religion であるという考えをすでに表明していた。彼が重視したのは、noble & brotherly love であり、この愛情がお互を結びつける a virtue であり、a kind of religion であると彼は信じていた。Truth, Justice, Kindness は作家の偉大な目的であるが、この三つに、晩年の Thackeray は祈り (solemn prayer) を考えている。

...a solemn prayer to God Almighty was in my thoughts...³⁰

彼の宗教心らしいものについて、J. Y. T. Greig からの次の引用文は意味深いものを示している。

In so far as Thackeray had a faith at all, it was a simple one, the core of which was devotion to Jesus Christ and the doctrine of love. When he tried to express this in untheological terms, he found himself ringing the changes on three words, *fun*, *truth*, and

love...., he urged *Punch*...not to forget 'that if Fun is good, Truth is sill better, and Love best of all.'³⁰⁾

愛を一種の宗教と考えた Thackeray は、見たところヒュモラスな笑いをまぎらしているけれども、人生を空しく皮肉に観照し、神の力のいぎとどかなくなった 19 世紀イギリス人の生活態様の中に、一沫の悲劇性を見ている。

注

- 1) James H. Wheatley, *Patterns in Thackeray's Fiction* (London: The M. I. T. Press, 1969), p. 77.
- 2) *Ibid.*, p. 77.
- 3) 1853 年 1 月 4 日付, Thackeray より母への手紙である。
- 4) 滞米中, Washington より, 1853 年 2 月 26 日付の母宛の Thackeray の手紙による。
- 5) 1853 年 2 月 26 日付の母宛の Thackeray の手紙による。
- 6) 1854 年 2 月 7 日付, ローマ滞在中の Thackeray より母への手紙による。
- 7) 1852 年 9 月 26 日付, 母より Thackeray 宛の手紙による。
- 8) 1841 年 7 月 27 日から 8 月 11 日に至る日記。
- 9) 1839 年 12 月 23 日付, 母宛の Thackeray の手紙による。
- 10) 1850 年 6 月 3 日付の娘たち宛の Thackeray の手紙による。
- 11) 1836 年 9 月 23 日付の母宛の Thackeray の手紙による。
- 12) 1850年1月3日付, Lady Castlereagh 宛の Thackeray の手紙である。
- 13) Gordon N. Ray, *The Buried Life* (Harvard Univ. Press, 1952), p. 26.
- 14) James H. Wheatley, *op. cit.*, p. 65.
- 15) cf. Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties* (Oxford Univ. Press, 1956), pp. 234-5.
- 16) David Daiches, *A Critical History of English Literature* (London: Secker & Warburg, 1960), p. 1062.
- 17) cf. John W. Dodds, *Thackeray: A Critical Portrait* (New York: Russell & Russell, Inc., 1963), p. 95.
- 18) Gordon N. Ray, *op. cit.*, pp. 36-7.
- 19) John W. Dodds, *op. cit.*, pp. 117-8.

- 20) Lambert Ennis, *Thackeray: The Sentimental Cynic* (Northwestern Univ. Press, 1950), p. 127.
- 21) 1847 年 10 月 23 日付の William Smith Williams 宛の Thackeray の手紙.
- 22) 1859 年 5 月 15 日付の Mrs. Theresa Hatch 宛の Thackeray の手紙.
- 23) Trollope, *Thackeray* (London: 1879), p. 61.
- 24) cf. Lambert Ennis, *op. cit.*, pp. 200-1.
- 25) cf. James H. Wheatley, *op. cit.*, p. 128.
- 26) cf. John W. Dodds, *op. cit.*, p. 114.
- 27) cf. Lambert Ennis, *op. cit.*, pp. 127-8.
- 28) Lambert Ennis, *ibid.*, p. 211.
- 29) 1848 年 12 月 18 日付の母宛の Thackeray の手紙による.
- 30) 1847 年 2 月 24 日付 Mark Lemon 宛の Thackeray の手紙参照.
- 31) J. Y. T. Greig, *Thackeray* (Oxford Univ. Press, 1950), p. 28.